

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸雅史

学位申請者 長沼 君主

論文名 「言語学習動機づけ診断尺度の開発とその展望」

結論

長沼氏から提出された博士学位請求論文「言語学習動機づけ診断尺度の開発とその展望」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、根岸雅史を主査に、副査として、前年度まで申請者の指導教員として、とくに動機付け尺度の構築に力を注いでくださった田島信元 白百合女子大学文学部教授を学外からお迎えし、学内からは高島英幸教授、宇佐美まゆみ教授、海野多枝助教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本研究は言語学習における動機づけの診断尺度を開発し、その教育場面での

応用可能性を探ることを目的とした。診断尺度を用いることで、学習者の動機がどのような状態であるのかを知り、何が生徒の動機を失わせ、学習を阻害しているのか、どうしたら生徒の動機を高めることができるのかを、診断結果およびその背後にある動機づけ理論に基づいて考えることができる。そこで、本研究では、第2言語習得理論および心理学における動機づけの測定尺度を概観し、それらにおいて測定されている動機づけの様々な要因を分析することにより、言語学習動機づけ診断尺度の開発を行った。その上で、実際の教育場で経年調査を行うことにより、言語能力の発達と言語学習動機づけとの関連を調べた。また、診断結果をどのように学習者にフィードバックしていくかなど、診断結果の利用可能性についても考察している。

本論文は大きく3部から構成されている。第1部(第1章・第2章)の理論編では言語学習動機づけの診断にあたって、動機づけの状態を解釈するために必要な動機づけ研究の理論的側面を概観し、第2言語習得研究および心理学における動機づけの構成概念の比較検討を行った。第1章では、第2言語習得研究における統合的動機づけと道具的動機づけのパラダイムと、心理学における内発的動機づけと外発的動機づけのパラダイムの比較を通して、関連する諸概念を概観し、言語学習に特有の動機づけの要因の理論的特徴を考察した。言語学習における社会的文脈として、言語環境、学習環境、使用環境の3つを取り上げ、言語環境においては、第二言語環境と外国語環境での目標言語文化への態度から、統合的動機づけの性格が変化し、また、道具的動機づけもその社

会的な意味づけが変わることにより性格が変化することを示した。それに対して、学習環境では、形式的な学習環境と、非形式的な学習環境とがあることを踏まえた上で、物理的な学習環境と人的な学習環境のそれぞれの観点から動機づけに影響を及ぼす要因を取り上げ、統合的・道具的動機づけ以外の側面からの動機づけの変化を示した。そして、使用環境ではコミュニケーション欲求といった、異なったタイプの動機づけを取り上げ、言語環境と学習環境をつなぐものとしての位置づけを示した。

第2章では第1章で扱った内発的動機づけ研究に深く踏み込み、自律性に加えて、近年注目されている関係性の概念の考察を通して、言語学習の動機づけの根底にある基本的な欲求や動機づけの仕組みを考察した。また、その試みの中で、第2言語習得研究でも重要視される動機づけの社会文化的側面についての考察も行った。有能感から始まった内発的動機づけ研究が、自己決定理論を核として、自律性を中心概念と据えた研究へと展開し、さらに社会的要因をも扱う上で、関係性の概念を取り入れ、理論的に進化してきた過程を追った。そしてその中で社会的価値の内在化による外発的動機づけの自律的動機づけへの変化の過程にも触れ、多様な価値の間での葛藤について考察している。

第2部(第3章・第4章)の尺度開発編では第1部での理論的考察から得られた知見をもとに、言語学習動機づけのプロセスをモデル化し、既存の尺度を参考にしながら、実際に言語学習動機づけの診断尺度開発を行っている。第3章では、理論編で扱われた動機づけの諸要因を言語学習のプロセスにあてはめ、

学習のどの段階でどのような要因の影響を受けるかを示し、言語学習動機づけをモデル化している。モデルの中心には内発的動機が存在し、それが具体的な行動を伴った動機づけに至るまでに、様々な個人的、社会的要因が影響することを図示している。さらに、動機付けの既存の尺度を概観し、それらを言語学習の文脈にあてはめ、言語学習動機づけ尺度の開発を行った。その上で、開発された診断尺度の信頼性および妥当性を検証するとともに、言語学習動機づけに基づいた学習者の類型化の試みを行っている。

続く第4章では診断尺度の応用において問題となると思われる教室環境特有の動機づけの要因を探るため、教室観察とインタビューに基づいた質的研究を行い、関係性の及ぼす影響について考察している。その上で、診断尺度の改訂に向けて、関係性と関連した教室における動機づけ要因を測定する尺度の開発と検討を行った。尺度は被影響性因子と能動(受動)性因子から構成され、被影響性は学習環境と、能動(受動)性は使用環境と対応しており、学習場面での他者からの影響の受けやすさと使用場面での他者の前で能力を示すことへの態度を表している。

第3部(第5章・第6章)の実践編では第2部で開発された診断尺度を実際に用いて、言語学習動機づけの経年調査を行った。調査にあたっては、言語能力テストスコアとの関連も調べ、言語能力の発達に寄与する動機づけの要因を明らかにした。第5章では言語学習動機づけ診断尺度に関係性関連動機づけ尺度を加えた改訂版言語学習動機づけ診断尺度もとに、言語学習動機づけの実態

調査を行った。動機づけ調査にあたっては、文部科学省指定の SELHi(スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール)校と共同研究を行い、3年間の言語能力および動機づけの経年変化を追った。

調査では SELHi 対象クラスと非 SELHi クラスとの対比を行いながら、SELHi クラスの学習者の動機づけ的特長を明らかにした上で、1年から3年に学年をあげるに従っての変化を分析している。そしてさらに言語能力テストスコアの発達から低上昇群と高上昇群とに分け、その動機づけの差異を分析し、言語能力の発達に寄与する要因の考察を行った。その上で、言語能力診断調査実施にあたっての教員や学習者の内観を紹介し、その結果のフィードバックについて述べた。最後の第6章では、研究上の成果をまとめ、一般化の可能性などについての限界点を明らかにした上で、今後の研究の展望について述べている。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の三点である。①動機付けの構成概念とモデルについて、第二言語習得と心理学両方の領域における先行研究から広く検討し、より包括的なモデルの構築を試みている点。②特に、従来の SLA では検討が不十分であった「関係性」要因に着目し、これを動機付けモデルに組み込み、尺度化しようとしている点。③多くの実証的データに基づいて、具体的な分析・考察を行い、尺度の信頼性、妥当性について計量的に検証しようと試みている

点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。①個々の章はそれぞれにまとまりをなし、興味深い
が、論文全体としてみた場合の関連性が少々希薄である点。②動機づけの研究としては非常に貢献するが、モデルにどのように反映されているのか、という説明が不十分である点。

だが以上の2点は、むしろこの論文のスケールの大きさに起因するものであり、論者の力量を高く評価するからこそ生じた批判であることは言うまでもない。また、こうした疑問や批判点にたいする口述試問での応答は、指摘のあった諸点をあらかじめ自覚していたと判断されるきわめて適切なものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。